

第1部：講演1

メディア環境の変動とメディアリテラシー

— 震災から見られる社会情報学とは何か —

The change of the media environment and the media literacy The problem of the social informatics which can be seen from information process of the 311 great earthquake

伊藤 守

【経歴】

法政大学大学院社会科学研究所博士課程単位取得退学。札幌学院大学社会情報学部助教授，新潟大学人文学部教授を経て現職。専門分野は，社会学，メディア・スタディーズ。著書に『記憶・暴力・システム — メディア文化の政治学』，共著に『デモクラシー・リフレクション — 卷町住民投票の社会学』，編著に、『テレビニュースの社会学 — マルチモダリティ分析の実践』など。社会情報学会会長。

【要旨】

今回の大震災から原発事故に至る過程において明らかになったことは，新聞やテレビといった主流ジャーナリズムと，雑誌やインターネットの対比です。何が伝えられていて，何が伝えられないかが，メディアによって異なっていることが如実に露呈しました。それは，情報の受け手側からいえば，このような状況を分析し，真実をつかみ取るメディアリテラシーが試されているとも言えます。この震災に関連して見られたメディアの有り様を示すことにより，情報の送信・受信の両面から，社会情報学とは何かということを開き直します。

1. 大震災・原発事故を社会情報学から考える

早稲田大学の伊藤です。どうぞよろしくお願いたします。今回の企画段階において，震災と社会情報学というテーマでというお話を聞いた時に，このテーマは非常にタイムリーで重要な問題提起であると思ひまして，報告を引き受けさせていただくことにいたし

ました。また，社会情報学部の創設20周年記念ということで，記念シンポにお呼びいただいたことを非常に光栄に思っております。ありがとうございます。しかも，スタートの最初の4年間，私もこの大学で社会情報学部のスタッフとして一緒に仕事をさせて頂いたという経緯もあり，20周年を迎えられたことを非常に嬉しく思っております。同時に，もう20年も経ってしまったかと，自分の研究がどれほど進んだかということを見ると，何

かむなしくなってしまうというところもございますけれども、今日は、与えられた課題を私なりにどう考えるかということでお話しさせていただきます。

その前に、今日20周年ということですが、こちらの大学の社会情報学部で出されている『社会情報』という紀要がございます。それを何日か前にもう一度読み返してみました。その時に10周年の紀要の内容でこのようなことが書かれていました。その当時この大学の学長を務められていた狩野先生が書いておられる訳ですが、社会情報学部が出来て10年目であり、社会情報学会も出来たということで、この学問領域が市民的な認知、市民権を受けたと考えて良いのかということをお聞きされています。そこで狩野先生は極めて厳しいことを発言されていて、そのようなことはないと言っています。それから10年が経過して、まさに20年経って、社会情報学が今後どう形成されていくかということをお聞きすることが必要です。その意味でも、今回こういう形で発言をさせていただくということを、非常に嬉しく思います。

先ほど、今回のこのテーマ、非常に意義があるテーマであるとお話をしましたが、今回の震災、それからとりわけ原発事故を社会情報学の観点から考えるということは、極めて重要な課題です。例えば、阪神淡路の震災と比べて大きく変わったのは、震災時、従来であればテレビや新聞という媒体が、情報のプラットフォームを作って、一人一人が新聞やテレビから発信される情報を、共有し思考し行動するということが一般的でした。今回この構造が本当に壊れつつある、あるいは、解体しつつあるということがあらわになったという点で、社会情報学の観点から見ても極めて重要な出来事でした。それはこの20年近くの期間に生じた社会情報過程の変化から帰結した事態であると言えますし、今後20年か30年の間に起きるであろう変化の、言わばス

タート地点として考えることも出来る非常に大きな出来事でした。テレビや新聞が情報のプラットフォームを作っていた時代から、一人一人が情報を選択・発信・補完して利用していくという新しい社会情報過程が成立しつつある、あるいは成立したということが大きな特徴です。若い人も含めて、政府や既存のメディアが発信する情報が全てではないということを経験した出来事だった訳です。

2. 社会情報過程の歴史的变化

2-1. 近代社会構造におけるマスメディアの特徴：モル的コミュニケーション

今、従来のテレビや新聞が作り出すプラットフォームは変わりつつあるということをお聞き上げましたけれども、既存のメディアがこれまで作りだして来た、構造化してきた社会情報過程の特徴は何かということをお聞きしてみたいと思います。既存のメディアが構造化した社会情報過程は、もちろんこの20世紀を通して近代社会という大きなフレームワークの中で作られて来た訳です。では、近代社会の基本的な構造はどういうものであったか。社会学の中で様々な議論が出て来ていますが、いろいろな視点・視角がありますが、ほぼ共通して、近代社会というのは機能分化した社会であるというのは、共通の理解が得られていると思います。それぞれの機能が分化してサブシステムを構成している。その中で全体の構造が出来ているというのが近代社会であるということです。このことをハンナ・アーレントの図式に従い三つの領域として見ていきたいと思っています。

第一は、機能分化した中で成立したのが私的領域ということです。それ以前の社会であれば、生産・労働・家族は一体で行われていました。ところが近代に入って、近代家族つまり父と母そして子ども、これが構成員になって営むという私的領域が成立しました。第二に、私的領域から生産労働は別のものと

して分離していき、これが社会的領域となりました。生産と労働の領域です。第三に、もう一つ重要な要因の公的領域です。社会の構成員が共通した利害関係について議論し討議をするという政治の部分と、それから、人々が住んでいるコミュニティ・自治に関してお互いにこれに参加する部分の領域です。このように三つの領域に機能分化した社会が、近代社会だと考えて良いと思います。

実は、新聞・ラジオ・テレビは、言わば社会の機能分化に対応した社会技術的なメディア群であったと考えて良いと思います。私的領域、社会的領域、公的領域を言わば繋いでいくメディアであるということです。これまでマスメディアが特に「社会の窓」と言われていたのですけれども、まさに社会で起きている様々な出来事を、私達はマスメディアを媒介して、基本的には家庭の中でそのことを知っていくという構造だったのです。

イギリスの社会学者のレイモンド・ウィリアムズはこの構造をモバイル・プライベートイゼーションと概念化しました。モバイルは移動することです。それからプライベートイゼーションは私事化ということです。つまり、家と会社、私的空間と社会的空間を移動する現代人が、家の中で公的な領域の様々な出来事をラジオやテレビというメディアの窓を通して知るといふ基本的な構造を作り出して来たということです。とりわけラジオとテレビが20世紀の基本的なメディアです。街頭ラジオや街頭テレビの時代がありましたが、基本的に私達は家庭の中で、私的領域の中で情報を受容するというを自明のものとしてきた訳です。このことは改めて考えて良いことだと思います。この構造こそ、マスメディアの三つの特徴を作り出している訳です。

第一は、マスメディアの送り手側がどの情報を流すかということです。情報の選択やゲートキーパーの役割です。加えて、伝える情報の何が問題なのか、何を考えるべきなの

かという、アジェンダセティングもマスメディアが行うことです。これがこれまでずっと指摘されてきたマスメディアの機能だった訳です。

第二に、もちろん当時のメディア技術からして、情報の移動は、送り手から受け手に向けた一方向の流れでした。受け手から送り手というのは、例えば視聴率という形で出る場合もあるでしょう、あるいは視聴者の声とか、新聞の読者の声ということでフィードバックされることはありますけれども、基本的には情報の流れは一方向だった訳です。

第三に、存在論的安心というアンソニー・ギデンズという社会学者が使っている概念です。基本的にマスメディアにとって、社会の中で起きている出来事は予期出来ない出来事なのです。例えば今回の震災もそうでしょう。あるいは殺人事件といったこともそうでしょう。人々がそういった自分が予期しなかった出来事が起きた時に、基本的にメディアは視聴者が納得し、理解出来るというフレームを提示しながら情報を出していきます。これを存在論的安心とキデンズは言いました。日常生活に無秩序やカオスが生じない安定した構造を作り出していく。存在論的安心という、これがマスメディアの基本的な特徴をなしているということです。

これらのマスメディアの基本的特徴である、情報の選択、一方向の情報移動、存在論的安心を考えると、ある集団の統一性や全体性が前提された中での情報流通・情報移動であるということがわかります。これをモルスのコミュニケーションと、ここでは概念化しておきたいと思います。図1のように図式化しますと、この三角形のトップがまさに送り手で、全体がプラットフォームを作っているのです。テレビ、新聞、雑誌、ここから発信された情報がオーディエンスに流れていきます。これが社会情報過程の基本的な構造をなしているのです。

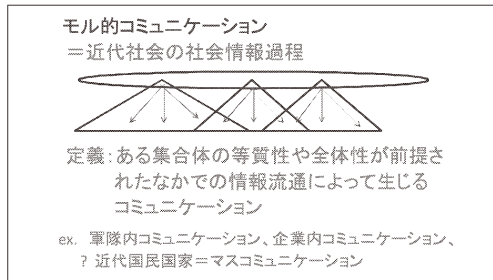


図 1

その際、ここで強調しておきたいのは、組織です。軍隊でのコミュニケーションが特徴的かもしれません。トップが決断し情報が下のサブシステムに流れていきます。企業のコミュニケーションはまさにそうです。トップが決断し、その決断に従って各部署に情報が流れていく。大きく見ると近代の国民国家も一つのある集合体、統一性や全体性を前提にして、マスメディアが情報を流している。一方向で流しているのです。このことによって、言わば社会の統合を担う装置としてマスメディアが機能しているのです。これが基本的な構造だったように思います。ですから、社会の統合にとってマスメディアは不可欠な装置として機能してきた訳です。政治学のルイ・アルチュセールという人は、このことを重層的決定と言いました。学校であれ、あるいはメディアであれ、様々な装置が重層的に決定を行って社会の統合を図っていくという考え方です。このような情報の構造をモル的コミュニケーションと呼んでおきたいと思います。

2-2. 近代直前の社会情報過程：分子的コミュニケーション

私達はこの構造を自明のものとして考えておりました。送り手がいて受け手がいる。そしてそこに情報が流れていく。オーディエンスは私的空間の中でそれを需要するという、非常に自明のものとして考えてきました。考えてきたからオーディエンスという、オー

ディオ、音を聞く人として受け手を捉えて来た。しかし近代社会が成立する直前に目を向けてみると、実は近代の社会情報過程は自明のものではないということが浮かび上がってきます。19世紀後半のことです。今日のテーマからして、どうしてこの19世紀後半の昔の話の聞かなくてはいけないのかと考えられるかもしれませんけれども、少しお付き合い願いたいと思います。

実はこの19世紀後半ですが、先ほど申し上げたように、近代社会の機能分化へ向けて離陸してく時期です。スタート地点になっているのです。スタート地点ですから近代家族の規範がまだ内面化されていない。父親としてどう振る舞うべきか。母親としてどう振る舞うべきか。まだまだ形成途中。それから、労働規範もまだまだ内面化されていない。午前8時から働いて午後6時7時まで働くという、時間感覚すらまだ出来ていません。もう一つ、選挙制度もまだまだ制度化されていませんでした。この状況に注目した社会学者は、農村から都市に移動・移民し、都市空間の中で様々な社会現象を起こしている人達を群衆、あるいは公衆と概念化しました。この当時の人達ももちろん労働し家族を持っていた訳ですけれども、規範が次第に内面化する中で、様々な葛藤があります。しかも政治的な参加が制約されている中で、都市空間の中でまさに群衆として様々な行動を起こしていく、そのことに注目した訳です。ギュスターヴ・ル・ボンという人がいました。それから当時、一つの都市で200から300発行されていた新聞を読むと、この新聞の内容を人々が模倣し、噂となって、様々な情報が伝達されていくということに注目したガブリエル・タルドという人もいました。実は、タルドやル・ボンが注目した社会現象は、今日からみると、近代の社会が成立する以前の非常に興味深い情報現象でした。タルドは小さな模倣ということに非常に注目をしました。新聞というメ

ディアが都市空間の中で読まれて、そこに流行が発生した。流行現象というのはまさに近代の現象です。19世紀後半に始まりました。様々な政治的な主張が、都市の中でこんなことが言われている、あんなことが言われていると、人伝いに伝わっていく。タルドは犯罪にも注目しました。凶悪な犯罪が起きますと、これが連鎖反応のように次々に犯罪を起こしていく。それから19世紀後半から20世紀にかけて、いろいろなものが発明されて、これが人々に一気に需要されていきます。実はこれも情報です。流行にしても政治的な主張にしても、犯罪が起きたということにしても、こんな発明が出来たにしても、これら様々な情報が、社会の成員の間に広まっていくという状況を、都市空間の中で社会学者たちは見定めていたのです。実はこの小さな模倣が、言わば大きな社会現象を作り出したのです。噂あるいは政治的蜂起・デモ・暴動など、集合的な行動を引き起こしていきます。当時、社会学者のエミール・デュルケームは、これを集合的沸騰と言いました。情報が次々に流れていって、大衆の間に集合的な行動が湧きあがっていく状況です。

これを図式化します。ちょっと変な図式かもしれないですけども見て頂きたいと思えます。図2は、模倣の情報過程です。一つの情報が流れる。例えば、個人から噂が流れて、情報が流れて、受け止めた人はまたこの情報を流していく。別の情報も入って来る。例えば、ここから情報が入ってこの人に伝わってこっちに行く。媒介をして伝わった情報とストレートに入った情報は違います。個人が経由していきます。この情報は同一の情報も流れていく訳ではないのです。常に差異を含んで流れていく。個人はこの情報流通の結節点であって、もちろん情報の受信者でもありますが発信者でもあります。それぞれの結節点で情報は、常に変容し増幅していく。これと図1を比較してみると、先ほど申し上げた送

り手と受け手がいて、受け手をオーディエンスとして概念化していくという考え方が、極めて歴史的に限定されたものだということがわかると思います。ここではこの情報過程を、分子のコミュニケーションと概念化しておきたいと思えます。先ほどのモル的コミュニケーションと対比させて言えば、統一化に向かうよりはそれに抗して散逸していく情報です。構造から漏れ出していく、そういう情報の流れです。強調しておきたいのは、これは制御出来ない情報の流れだということです。いったん流れた情報はどこに向かって流れていくか誰も制御できません。従って、先ほどの同一化されたモル的な集合を横断し越境していきます。性を超え、男女という境界を超えていきます。年齢も超えていきます。地域も超えていきます。国境も超えて情報が制御出来ないままいたる所に流れていく。これが言わば分子のコミュニケーションの特徴です。

まとめておきましょう。つまりこの分子のコミュニケーションは、小さな模倣を核にしたミクロの情報過程が、その情報を発信した人やそれを中継した人の意図を超えて制御することが出来ない。いったん流れてしまうとどこに向かっていくのか、どのような情報に変容していくのか誰も制御出来ない。そういう独自の自立性とリアリティを持つような特異な情報文化であるということです。先ほど申し上げたように、タルドは19世紀後半にリアルな都市という空間でこういう情報過程が

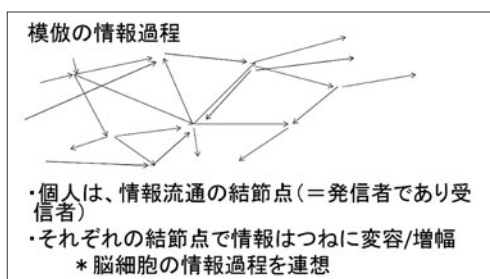


図2

あるということを一いち早く気付いていたのです。

2-3. 第二の近代の社会情報過程

今日私がお話したいのは、19世紀後半の本当に一時期に成立した情報現象と考えて良いと思いますが、実は今日デジタルネットワーク上に再び分子的なコミュニケーションとでも言うべき特異な情報過程を伴った流れが出来て来ているのではないかということです。簡単に整理するとこのようになります。19世紀後半に都市型の分子的コミュニケーションが成立した。近代は、もちろん分子的なコミュニケーションが無くなった訳ではありません。噂とか流行現象ということで近代の中でもこの分子的コミュニケーションは常に存在し、成立してきた訳ですけども、しかしなんとと言ってもモル的コミュニケーションが社会の基盤をなして、これまでの研究でも噂とか流行現象についての研究はありますけれども、あくまで付随的なものとして考えられて来たのではないのでしょうか。しかし、今日第二の近代のところに書きましたが、デジタル型の分子的コミュニケーションとモル的コミュニケーションが、言わば接合し融合した、特異な状況に至っていると私は考えています。

3. プラットホームを離れた市民のメディア環境

ではこれを前提に、今日の状況をどのように見ることが出来るかということをお話します。「プラットホームを離れた市民のメディア環境」というタイトルを付けましたけれども、まさにプラットホームを作り出して来たこれまでの既存のメディアが、社会的地位あるいは信用度という点で極めて大きな変容を示しているのです。例えば今回の大震災においても、取材力の低下ということが指摘されました。これはこの後の岩上さんが詳しくお

話をされる内容かと思えますけれども、日本のジャーナリストというのは基本的に企業の中に入って教育を受ける組織ジャーナリズムです。これが極めて大きな問題を抱えております。朝日新聞に入ったら朝日の記者として取材をする。独立したジャーナリズムあるいはジャーナリストの養成のための専門機関を作るという点で、日本は決定的に遅れています。それから権力との関係が、今回非常にあらわになりました。メディアは自立しているだろうと考えられていましたけれども、実はそうではないということです。それから自主規制の問題があります。今回マスメディアが政府の見解を繰り返し説明し解説するだけに終始したとの批判にさらされています。「ただちに人体に影響はありません」ということをマスメディアに伝えながら、実はマスメディアの記者は、企業から会社から30キロ圏内に入ってはいけないと言われて入らなかったのです。入らないで伝えている訳です。情報としては「ただちに影響はない」と言っている当のメディアが、30キロ圏内に入らない。これをどう考えたらよいのでしょうか。

それから、科学者とメディアの関係も、これも言わば失敗したと言わざるを得ないと思います。科学者は何パーセントの確率でこれこれのことが起きる、としか言えない。因果的にこうなるということはほとんど言えない訳です。それが科学者です。科学の一つの基本的なあり方でしょう。将来の可能性がどれほどであるか、確定的なことは言えない訳です。しかしテレビの中では言わせてしまった側面がある。メディアが言わせてしまった。これはあとからまた議論することがあろうかと思えますけれども、こういう中で、何度も繰り返し指摘されたようにテレビ、新聞に関して信頼性が著しく低下したということは明らかだろうと思います。

それに対して、今回活躍したのは、独立系のジャーナリズム、それから個々人がネット

を通して立ち上げる情報だった訳です。そこに立ち上がったのは、散逸的な情報の流れでした。境界を越えて移動する情報の流れでした。誰もが情報を発信するボトムアップの情報です。皆さんも、多分今回の3.11の際にはいろいろなサイトをご覧になったのではないのでしょうか。私も本当にテレビだけでは不安だと思っいろいろなサイト、京都大学の原子力研究所、小出裕章さんあるいは今中哲二さん、それから岩上さん自身が配信をした原子力資料情報室、あるいはドイツのサイト、気象庁のサイト、日本のビジュアルジャーナリスト協会に所属しているフリーのジャーナリストの様々な情報にアクセスしました。あるいはOurPlanet-TV、私はそこの関係者と非常にいろいろ交流していますけれども、独立系のネットテレビからの情報にも注目しました。それから福島の市民団体が発信している情報もありました。このような様々な情報を手がかりにして、事態がどのように進んでいるかということを見た訳です。

今回の事態に見られる社会情報は、期せずして専門家、ジャーナリスト、一般市民、アクティビスト、こういった立場が異なる人達が、その垣根を越えて情報を発信し補完し返信し受容していく、ある種のそこに集合知あるいは共同知というものが立ち上がり、そういう過程の萌芽が垣間見えたように思います。そこではまさに知を共有するコモンの原理が成立したかのように思えます。今日、例えばアントニオ・ネグリという人が、コモンウェルス、コモンということ非常に重要視して、これからの社会の原理の一つとしてコモンを強調していますけれども、その意味でもコモンという原理が、言わばネットワーク上の新たな情報の流れの中に生まれてきたように私には感じられます。

個人を前提に複数の個人が触発し合うことで、そこに双発的な特性が生まれます。集合知とは、個人の能力の数倍以上の集団的能力

が生まれるという仮説にたっている考え方で、例えば2000年にハーワード・ブルームは、まさにグローバルブレインというタイトルの本を書いています。ネットワークの中で地球的な規模での頭脳ということでしょう。はるかに壮大な夢のように思います。思いますが、一つの可能性としてこのネットワークでボトムアップの分子的なコミュニケーションを通して、こういうことが展望出来る状況も、一方では生まれているということではないでしょうか。

しかし、この分子的コミュニケーションを、私は単純に良いと言っているわけではありません。これは皆さんもご存じではないでしょうか。分子的コミュニケーションは、情報が定かではない情報の移動です。ですから、噂、風評、デマが避けられないと思います。従って、人々の行動が一方向に極端に一気に向かうという特性や、あるいは特定の集団や個人を排除したり糾弾したりするという暴力的な過程も孕んでいると言うべきでしょう。もう少し言葉を変えて言うと、モル的コミュニケーションが言わば神話を構築することで、権力作用を起こしてきた。これが近代社会であるとすると、分子的コミュニケーションはそれとは別の形で権力装置化しているという可能性も、実は押さえておかなければいけないということです。特に、最近こういうのが学生の間でよく言われていて、「私、ネットするのですけれども、マスメディアは真実を隠している、マスメディアなんか見ている奴は馬鹿だ、ネットの方にこそ真実がある」と言うのです。陰謀説でこの情報環境を語るという人達が極めて多くなっているような気がします。これも非常に分子的コミュニケーションが孕んでいる一つの側面であります。

以上お話ししてきたことをまとめますと、簡単に図式化すると図3のようになるのではないのでしょうか。今日のデジタル環境の中で、従来のプラットフォームが確かに解体しつつあ

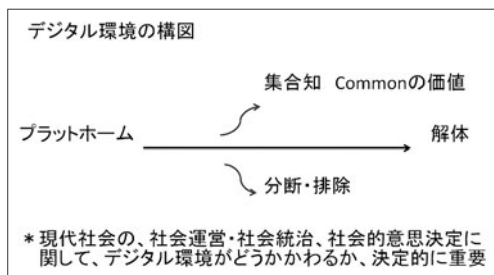


図3

る。解体しつつある中で、一方では情報のボトムアップという、専門家それから一般の市民、様々な人達の垣根を越えて集合知が生成する可能性が生まれている。多分、集合知の中に、北アフリカとか中東で起きた今回の民主化のデモも明記されて良いのかもしれませんが。もう一方で、ネット上の情報が、図3の下に示した分断と排除に傾いていくという、そういう機能も表裏のように併せ持っているということだと思います。従って、現代社会の社会運営、社会投資、あるいは社会的な意思決定に関してこのデジタル環境がどう係わるかということが、実は社会情報学にとって極めて重要になります。検証すべき課題であるし、このことをどのように解決していくかが社会情報学に求められていると思います。

4. 「ポスト 3.11」時代の社会情報学の研究と教育

では、このような課題の中で社会情報学に何が求められているか。第一は第二の近代と言われる特異な情報過程を真正面から分析する学問でなくてはならないだろうということ

です。それから第二に情報過程の層序は私から見ると社会情報の対象がワンランクアップしたと見えます。これを全体の社会情報過程の層序の中でどのように特性を明らかにしていくかということも、社会情報学の大きな課題です。これが出来るのはまさに社会情報学しかありません。このことを強調しておきたいと思います。それから現代の社会情報過程の特質のために、これまで以上に幅広い視点からコミュニケーションとは何か、あるいは情報とは何か、それから当然のこととってきたオーディエンスという概念そのものも組み替えていかなければならないということだと思います。オーディエンスよりはむしろマルチチュードという概念が適切なのかもしれません。

最後にこれだけちょっと述べたいと思います。今回の東日本大震災、原発事故を前にして、日本の学術全体が問われていることです。科学とは何か。科学と社会のかかわりとは何か。これは原子力工学、災害防災学、医療福祉学、建築学、あらゆる学問が問い直しを受けている訳ですけれども、それと同様の意味で社会情報学も上記の課題と同じ課題に直面している。逆に言えば、飛躍出来る状況にあるということだと思います。企画の方々に頂いた、では社会情報学が何が出来るかということについては短期中期のまさに取り組まなければならない課題があるということを指摘して、報告にかえさせて頂きたいと思います。ではこれで私の報告は終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。